

大学生の自己概念と適応

村 田 義 幸
窪 田 龍 記*

A Study of the Self-Concept and Adjustment in College Students

Yoshiyuki MURATA and Tatuki KUBOTA

序

子どもの世界から大人の世界への過渡期にあたる青年期が、今日ほど、社会の注目を集めている時期はない、と言っても過言ではないであろう。多くの青年が、若々しく生々とした生活を送り、新しい文化や価値を創造している一方で、校内暴力、登校拒否、非行、意欲減退、自殺、神経症等種々の病理的様態を示す青年も多く、大きな社会問題となっている。近年出版された青年心理学に関連する著書も青年期の病理を中心テーマにしているものが顕著である。

青年期は第二の誕生の時期であり、両親や家族から心理的に離乳し、自律する人間へと生まれかわる時期である。自己を1つの客観的対象として認識し、「自分は何者であるのか」、「自分は何になりたいのか」、「自分の生存は何のために必要であるのか」などを自ら問いかけ、自己を発見し、自己概念を形成し、自己を確立するという発達課題を青年は背負っている。Erikson, E. H. (1959, 1963) は Freud, S. の心理一性的発達理論を発展させ、心理一社会的な観点からパーソナリティーの発達を論じ、青年期は、自我同一性 (ego-identity) が確立されるかそれとも自我同一性が拡散ないし混乱を来たすかの危機に晒されている時期と規定し、この危機を克服して自我同一性を確立することが青年に与えられた課題であると主張している。さらに、この青年の課題を心得た社会の側は、けっして大人としての責任と義務を青年には課しはしないから、青年期は、心理一社会的支払猶予期間 (psycho-social moratorium) であるとしている。

この、自我同一性の確立を図る極めて重大な発達段階である青年期は、同時に、「疾風怒濤の時代」とも呼ばれる。感情面、行動面で、高潮から落胆へ、あるいは自尊から卑下へと両極に極めて不安定に揺れ動き、それに伴って非常に激しい感情の表出がなされやすいことからこう呼ばれるのである。この「疾風怒濤」の状態をつくりだす原因としては、身心の発達に伴う欲求の多様化及び強度の増大と、それらの欲求の充足を阻止する種々の

*熊本県菊地郡合志町立武蔵ヶ丘小学校

要因の存在が考えられる。青年自身の側にある要因としては、(1)要求水準の高さと固執性、(2)超自我の抑制、(3)経験不足や未熟さからくる失敗体験などが考えられ、青年の取りまく社会の側の要因としては、青年に対する社会的制限の矛盾が考えられる。青年は子どもと大人の境界にあって、子どもでもないし、かといって大人でもないという、きわめて不安全な社会的立場に立たされる。境界人 (marginal) として、青年は子どもとしての義務と大人としての義務とが同時に強要される反面、権利については、子どもとしての権利も大人としての権利も厳しく制限されている。高学歴社会を背景にした競争の厳しさと共に、青年のうちに欲求不満をつくりだす大きな要因となっている。青年期は、他の時期以上に、不適応に阻りやすい状況にあるといえる。

目 的

自己概念は、内的関係枠として人間行動の理解や適応に関して重要な役割を演じていることが強調されている。特に、自我を確立し、自我同一性を形成することが期待される青年期においては、自己概念は特に重要な意味をもっているといえる。

自己概念を適応の指標として用いる際には、Bills et al. (1951) のごとく「現実自己」と「理想自己」との差異を測定するものが大勢を占めており、現実自己と理想自己の不一致度 (以下 Dis. と略す) と適応度の間には一義的・直線的関係があると考えられている。平井ら (1977) は、Self-Differential 尺度 (以下 SD 法と略す) で測定した自己概念と適応との関係を、中学生を被験者にして検討し、自己概念と適応度との関係が Block & Thomas (1955) Chodorkoff (1954) の主張する曲線的な関係ではなく、直線的関係であること、また現実自己と理想自己との Dis. だけでなく、椎野 (1966) の主張する如く、現実自己と「他者自己 (その人にとって大切な人が自分かどのように見られていると認知しているのか)」との Dis. が適応の重要な指標となることを明らかにしている。

Erikson, E. H. (1950, 1959) に従えば、青年期は「自我同一性の危機」に直面する時期である。この危機を克服してはじめてライフサイクルにおける次の段階へ発達していくことになる。もしこの危機を克服することができない時、「自我同一性の拡散、混乱」といった心的状態を示すことになる。鑑 (1979) は自我同一性拡散の病理的症候群として過剰な同一性意識、(2)選択の回避と孤立感・空虚感・麻痺、(3)対人的かかわり合いの拒否と孤立、(4)時間的展望の拡散、(5)勤勉さの拡散、(6)否定的同一性の選択を挙げている。青年期における適応を問題にする時、自我同一性を抜きにすることはできない、といえる。

自我同一性の測定については、遠藤 (1981) に記述されているように、質問紙法、投影法、SD法、Qソート法、面接法など種々の方法を用いた測定が試みられている。

砂田 (1978) は、青年期における自我同一性の測定は同一性混乱を測定するという考えの方が正確であるとし、日本における質問紙法による自我同一性測定に関する古沢 (1968)、西平 (1970)、高垣 (1970) らの研究をレビューした後、質問紙法による同一性混乱尺度を新たに構成している。さらに、砂田 (1979) において、同一性混乱を、①時間的展望混乱、②自意識過剰、③役割固着、④労働麻痺、⑤同一性混乱、⑥両性の混乱、⑦権威混乱、⑧価値混乱の8つの下位概念で定義し、34項目からなる同一性混乱尺度を構成している。そして、この同一性混乱尺度によって測定された自我同一性と、長島ら (1966) のSD尺度からの12の評定尺度によって測定された8つの自己像を測定し、諸自己像のずれ

を、個体と家族、市民社会、国家の間の諸規範のずれとし、(1)自己規範と各共同体の規範のずれは、自我同一性の確立に密接な関係をもち、それらの統合が不十分なほど同一性混乱はつよくなる、(2)家族、市民社会、国家という社会のカテゴリーを構成する規範は同一性混乱と強い関係をもつ、と結論している。

本研究では、青年後期にあたる大学生の適応を考えるにあたり、砂田（1979）の追試を行ない、同一性混乱の程度と自己概念の関係を検討することを第1の目的とする。砂田（1979）の測定した自己像のうち、「家族からみた私」、「大学生活での周囲の人からみた私」、「世間の人からみた私」は、いずれも大学生にとって重要な意味をもつ共同体において、その個人にとって大切な他者（significant others）から自分がどのように思われていると認知しているのかと問うているのであり、椎野（1966）や平井ら（1977）の用いた他者自己にあたる。彼らに従えば、「現実自己と他者自己の Dis. が大きい者は、同一性混乱も大きい」と考えられる。

本研究の第2の目的は、現実自己、他者自己、理想自己及び社会から期待されている自己のそれぞれについて認識した青年が、それぞれの共同体の中でどのように振る舞っているのか、または振る舞おうとしているのか、ということと同一性混乱の関係を検討することである。小此木（1974）によれば、自我同一性は、複数の「……としての自分」を統合する根源的な自分である。逆に、同一性の拡散・混乱の状態では、なりたいた「……としての自分」があまりにたくさん目に映ってしまって、どれが本当の自分なのかわからなくなって破産状態におちいってしまう。従って、「現実の私」と「家庭での私」（両親に対して子どもとしての自分など）、「大学生活での私」（学生として、または友だちとしての自分）、「世間での私」（日本人としての自分など）の間のずれの大きさは、同一性混乱と密接な関係があるといえる。

従って、本研究における作業仮説は下記の3つである。

仮説Ⅰ、自己の規範と各共同体の規範のずれは、同一性混乱と密接な関係をもつ。

仮説Ⅱ、現実自己と他者自己の Dis. は同一性混乱と密接な関係をもつ。

仮説Ⅲ、現実自己と各共同体での自分との Dis. は、同一性混乱と密接な関係をもつ。

方 法

1 手続き：a 同一性混乱の測定は、砂田（1979）の構成した34項目からなる同一性混乱尺度を用いた（表1）。反応は3件法とし、同一性混乱の方向を示している選択肢の反応を2点、「どちらでもない」を1点、逆方向を0点として数量化した。b 自己概念の測定では、長島ら（1966）のSD尺度大学生用のうちから表2に示す12の評定尺度を用い7段階評定させた。評定概念は「現在の私」（以下 IR と略す）、「家族からみた私」（FR）、「大学生活で周囲の人からみた私」（UR）、「世間の人からみた私」（SR）、「理想の私」（II）、「家族から望まれている私」（FI）、「大学生活での周囲の人から望まれている私」（UI）、「世間の人から望まれている私」（SI）を用いた。c 現実自己と各共同体での自分との Dis. 測定では、上記 b の12の評定尺度を用い、「現実の私」（R）、「家庭での私」（FS）、「大学生活での私」（US）および「世間での私」（SS）の4つの自己を評定概念として用いた。

表1 同一性混乱尺度の項目 (砂田1979)

下位概念	項 目 内 容
時間的展望の混乱	1. その日のうちにすべきことを翌日まで延ばすことがある 2. なんでも物事をはじめるのがおっくうだ 3. ひとかどの人間になろうとする希望を失ないそうになる 4. 待たされるととてもいらいらする。
自意識過剰	1. 私は十分に自分を信頼している 2. やれる自信があっても人が見ているとうまくできない 3. 私は自意識過剰だ
役割固着	1. 一生の仕事についてたびたび志をかえた 2. 私はすまないことばかりしてきた人間だ 3. どうしてよいか決心のつかないことがよくある 4. 何かしているより空想にふけっているほうがよい 5. 時々ぼんやりしてとりとめもないことを考えていることがある 6. 今までの生き方はまちがっていた
労働麻痺	1. 本を読んでも今までのようによく理解できない 2. 注意を集中するのに他の人よりも苦勞する 3. 時々頭の働きがにぶくなる 4. 一つ仕事に打ちこむことができない
同一性混乱	1. 今の自分は本当の自分でないような気がする。 2. 私には相反する二つの性格があるように思える 3. 気がかわりやすい 4. 自分がなにものであるかわからない
両性的混乱	1. 異性の友だちはほとんどできない 2. 私を本当に理解してくれる人はいない 3. *女に生れればよかったと思う 4. *よい友だちをたくさんもっている
権威混乱	1. まわりの人は私を一人前にあつかってくれない 2. 機会があっても私はよい指導者にはなれないだろう 3. 本当に尊敬できる人が自分にはいない 4. いばっている人がいると言うことが正しくてもわざと反対したくなる 5. *困った時には相談するおとながいる
価値混乱	1. *私は確固とした政治的意見をもっている 2. *私は安定した人生観をもっている 3. 世の中の動きが時々わからなくなる 4. 悪いことがなにかわからなくなることがある

*「いいえ」のとき2点, 他は「はい」のとき2点

以上の手続きのうち, a, bは砂田(1979)とまったく同じ手続きで行った。調査は, 大学における心理学の講義時間中に実施された。調査の順序は, a→b, またはa→cの順序で実施された。

2. 被験者: 長崎大学教養部生および長崎総合科学大学の男子学生300名で, 1年生が中心であったが年齢は18-22歳の幅にあった。この内, 150名はaとbを, 残りの150名はaとcに解答した。

3. 調査時期: 昭和57年11月上旬の4日間。

表2 自己概念評定尺度として用いた12の形容詞対

No.	形容詞対		因子
1	外向的な	内向的な	向性
2	おしゃべりな	無口な	
3	丸い	角のある	情緒安定性
4	暖かい	冷たい	
5	憶病ない	勇敢な	強靱性
6	弱々しい	たくましい	
7	誠実な	不誠実な	誠実性
8	まじめな	ふまじめな	
9	安定した	不安定な	過敏性
10	敏感な	鈍感な	
11	理性的な	感情的な	理知性
12	冷静な	情熱的な	

結 果

同一性混乱尺度の得点については、各下位概念内の合計得点は算出せず、34項目の総得点を求め、これを同一性混乱の指標として用いた。砂田（1979）の結果より、各下位概念の相関はきわめて強く総得点への各下位概念の関係性が強く加算しても無理がないと考えられたからである。全被験者の平均得点は30.3点であり、標準偏差は11.4であった。この得点の分布は正規分布に近いものであった（図1）。

自己概念の測定については、現実自己（IR）と他者自己（FR, UR, SR）との Dis., および個人の規準（II）と各共同体の規準（FI, UI, SI）との Dis. を、 $Dis. = \sqrt{\sum d^2}$ （d は各評定概念の間の12の評定尺度によける差）の公式を用いて求めた。

現実の自己（R）と各共同体での自分（FS, US, SS）の Dis. についても自己概念と同様に処理した。

1. 仮説Ⅰの検討

「自己規範と、家庭、大学、世間という各共同体の規範とのずれは同一性混乱と密接な

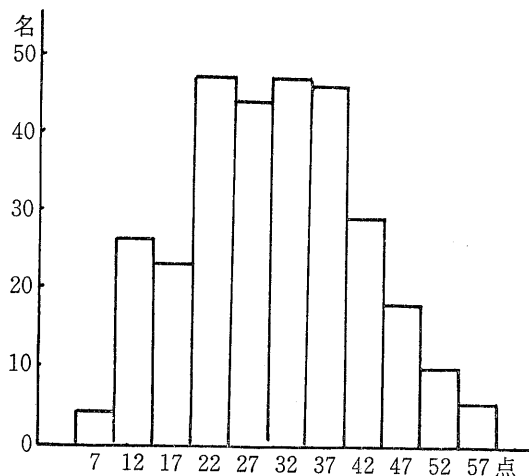


図1 自我同一性混乱尺度の分布

表3 理想自己とその他の理想像のずれと同一性混乱

群	II-FI		II-UI		II-SI	
	H	L	H	L	H	L
M	31.9	29.8	31.0	27.2	32.1	28.7
SD	11.5	11.2	12.5	8.4	11.7	9.9
t	0.97		1.52		1.33	

表4 現実自己と他者自己と同一性混乱

群	IR-FR		IR-UR		IR-SR	
	H	L	H	L	H	L
M	32.2	27.8	30.4	29.1	29.8	28.0
SD	10.7	11.3	11.8	11.2	10.0	11.6
t	1.70		0.48		0.71	

表5 現実自己と各共同体での自分のずれと同一性混乱

群	R-FS		R-US		R-SS	
	H	L	H	L	H	L
M	37.3	24.4	34.4	25.2	32.7	26.9
SD	11.6	10.0	13.0	10.4	13.6	10.6
t	4.98*		3.48*		2.02**	

* $P < .001$ ** $P < .05$

関係をもち、それらの結合が不十分なほど同一性混乱はつよくなる」という仮説を検討するために、自己規範とその他の規範のずれの大きい群（H群）とずれの小さい群（L群）に分け、両群の同一性混乱得点の平均を比較した。II と FI, UI, SI の間の Dis. の大きい者37名（被験者の1/4）をH群、小さい者37名をL群とし、両群の平均得点を比較した。両群の M, SD 及び t 値は表3に示す通りであった。各組合せにおける両群の差は仮説の方向で差がみられたが、t 検定の結果、いずれの組合せについても、統計的に有意な差とはいえなかった。

2. 仮説Ⅱの検討

仮説Ⅱを検討するために、IR と FR, UR, SR との間の Dis. の大きい者37名（約25%）をH群、小さい者37名をL群として、両群の同一性混乱尺度得点の平均点を比較した（表4）。その結果は仮説を支持する方向で差がみられたけれども、t 検定の結果、IR-FR で傾向がみられた以外、有意な差はみられなかった。

3. 仮説Ⅲの検討

仮説Ⅲを検討するために R（表4における IR と同じ「現実の私」を評定概念として、同一の評定尺度上に7段階評定したのであるから、R と IR は同質のものであるが、被

験者が異なるのでRとした）と FS, US, SS の間の Dis. の大きい者37名をH群（約25%）、小さい者37名（約25%）をL群として、両群の同一性混乱尺度得点の平均を比較した（表5）。いずれの組み合わせにおいても仮説を支持する方向で差がみられ、t 検定の結果、R-FS, R-US の間で0.1%水準で有意な差が、また R-SS の間で5%水準で有意な差がみいだされた。

考 察

1. 仮説Ⅰの検討

表3に示すとうり、仮説Ⅰを支持するような結果は得られなかった。また、現実自己や他者自己も、それをつくる枠組みはやはり同じ諸規範であるから、表4も仮説Ⅰの検討に役立つと考えられるが、しかし、表4からも仮説Ⅰを支持する結果をみいだすことはできない。

砂田（1979）においても、II-SI で1%水準の有意差が得られたものの、II-FI, II-UI では有意差は得られていない。砂田はその理由として、諸規範の標準偏差が小さく、みんなが同じようにとらえるという傾向が、理想の自己像において強かったこと、および、同一性混乱尺度の分布が多峰性を有していたことをあけている。本結果にこの理由をあてはめてみよう。紙面の都合で割愛したけれども、8つの各自己像の各形容詞対における標準偏差は、砂田と同様に小さい。また、II と FI, UI, SI の評定尺度上のプロフィール、および IR と FR, UR, SR のプロフィールがきわめて近似している。このことは、実際には種々の異質な共同体の場で生活している青年も、それぞれの異質な場で、きわめて類似した規範のもとで生活しているか、または、価値観が多様化し動揺の激しい現代社会のなかで、何を規範とすべきか迷い、同一化の対象をとらえにくくしているとも考えられる。第二の同一性混乱尺度の分布の特性については、本結果では正規分布とみなしうるものであった。ただ、散布度の小さいことが結果に影響したとも考えられる。

2. 仮説Ⅱの検討

椎野（1966）や平井ら（1977）に従えば、現実自己を他者自己、特に、多くの青年にとっては大切な人々のいる家庭や大学での他者自己とのずれは、同一性混乱と密接な関連があると考えられる。しかし、表4にみられるように、IR-FR で傾向がみられた以外、M群とL群の間に有意差はみられず、仮説Ⅱは支持されない。このことは、仮説Ⅱは誤りであり、修正されねばならないことを意味しているともいえるが、他方、IR と FR, UR, SR のプロフィールが類似していること、用いた評定尺度が12尺度と少なかったこと、調査時における被験者の態度などをチェックしなおし、さらに慎重に検討する必要があるといえる。

3. 仮説Ⅲの検討

表5にみられるように、R-FS, R-US, R-SS の全てにおいて統計的に有意な差がみられ、仮説Ⅲは支持された。FS, US, SS は、「子どもとしての自分」、「兄としての自分」、「学生としての自分」、「親友としての自分」、「長崎市民としての自分」など、それぞれ異なる社会的場面において、「……としての自分」としてどのような役割に果そうとしているのか、どのように行動しようとしているのかを示すものであり、R と FS, US, SS の Dis. が大きいということは、社会的場面の変化に応じて自分まで大きく変化

することを意味し、複数の「……としての自己」を統合する根源的な自分である自我同一性が確立されていないことを意味する。従って、同一性混乱尺度の得点と密接な関係があるのは当然であるかもしれない。しかし、仮説Ⅰ、仮説Ⅱに関係した8つの自己概念は、現実的か理想的か、自分がみるのか、他人がみるのかの違いがあるにせよ、認識面が強調されるのに対して、仮説Ⅲに関するFS, US, SSは行動的側面が強調されていると考えることもできる。もし、そうであるなら、RとFS, US, SSのDis.は自己規範と各共同体の規範のずれをIIとFI, UI, SIのDis. およびIRとFR, UR, SRのDis. 以上に代表すると考えられる。

要 約

本研究では、大学生の適応の問題を考えるにあたり、自己概念と自我同一性混乱の関係を検討することを目的とした。自我同一性混乱の測定は砂田(1977)の34項目からなる同一性混乱尺度を用いて行ない、自己概念の測定は長島ら(1966)の自己概念記述尺度大学生用から12の評定尺度を用い、被験者300名のうち、半数の150名については、8つの自己像を、また残りの150名については、「現実の私」、「家族での私」、「大学生活での私」、「世間での私」の4つを評定概念として行なわれた。

作業仮説は、Ⅰ. 自己の規範と各共同性の規範のずれは、同一性混乱と密接な関係をもつ、Ⅱ. 現実自己と他者自己のずれは、同一性混乱と密接な関係をもつ、Ⅲ. 現実自己と各共同性での自分とのずれは、同一性混乱と密接な関係をもつ、の3つであったが、仮説Ⅰ、仮説Ⅱは支持されず、仮説Ⅲは支持された。仮説Ⅰ、仮説Ⅱが支持されなかった理由についても検討されたが、本研究の結果からだけでは結論でだすことはできない。今後の検討がまたれる。

付 記

調査にあたり、長崎大学教育学部助教授善岡宏氏に多大の御援助をいただいた。感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) Bills, R. E., Vance, E. L., & Mclean, O., 1951 An index of adjustment and values. *J. of Consulting Psychol.*, 15, 257-261
- 2) Block, J. C., & Thomas, H., 1955 Is satisfaction with self a measure of adjustment? *J. of abnorm. soc. Psychol.*, 51, 254-259
- 3) Chodoroff, B., 1954 Adjustment and the discrepancy between the perceived and ideal self. *J. of Clin. Psychol.*, 10, 266-268
- 4) Erikson, E. H., 1959 Identity and the life cycle. New York: International Universities Press, Inc. (小比木啓吾訳編 1973 自我同一性, 誠信書房)
- 5) Erikson, E. H., 1963 Childhood and society (2nd ed.) New York: W. W. Norton. (仁科弥生(訳) 1978 幼児期と社会 みすず書房)
- 6) 遠藤辰雄(編) 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- 7) 古澤頼雄 1968 青年期における自我同一性の形成と親子関係 依田新(編) 現代青年の人格形成 金子書房
- 8) 平井誠也・村田義幸 1977 中学生の自己概念と適応, 長崎大学教育学部教育科学研究報告 25, 153-161
- 9) 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀洋道 1966 自我と適応の関係についての研究(Ⅱ)——Self-Differentialの作製——東京教育大学教育学部紀要 13, 59-83
- 10) 小比木啓吾 1978 アイデンティティ論 現代のエスプリ78 至文堂
- 11) 椎野信治 1966 適応の指導としての自己概念の研究 教心研 14 37-43
- 12) 砂田良一 1978 自我同一性に関する一研究: 質問紙法で中心として 愛媛大学保健管理センター年報 35-53
- 13) 砂田良一 1979, 自己像との関係からみた自我同一性 教心研 27 215-220
- 14) 鐘幹八郎・上里一郎(共編) 1979 自我同一性の病理と臨床 ナカニシヤ出版

(昭和58年10月31日受理)